

# 『後漢書』南蠻傳の領域性とその史的背景

— 交趾部と荊州南部の關係から —

三津間 弘彦

はじめに

一、「南蠻傳」の領域性と問題點

(一)「南蠻傳」の地理的範圍と疑問點

(二)『史記』・『漢書』の兩粵傳から「南蠻傳」に至る疑問點

(三)「南蠻傳」の領域性

二、後漢における交趾部と荊州南部の關係

(一)前漢の南越討伐路—後漢時代前史—

(二)後漢初期の關係

(三)後漢中葉の關係

(四)後漢後期の關係

(五)後漢末の様相

まとめ

## はじめに

中原王朝が渴望する理想的世界と、突きつけられる現実との矛盾は、文献資料上に散見される王朝と異民族との關係に象徴されよう。中國王朝側から見た異民族のあり方を検討することは、中國史のみの問題に止まらず、今日においてもある國家の存在が、同時にその國家にとっての「外國」の存在を意味する限り恆久的に検討され続けるべき課題である。

その中でも、筆者の本質的問題意識は、後漢がそうした問題に對して、いかにして向き合ったのかという點にある。そうした點を明らかにし得る最大の史料が、劉宋・范曄『後漢書』の四夷傳であることに疑問の餘地はあるまい。だが、四夷の捉え方は時代ごとに異なり、『後漢書』もまた、それ独自の四夷の捉え方が含まれていることは、想定されねばなるまい。

筆者が特に關心を抱く中國南方の異民族を見れば、司馬遷『史記』・班固『漢書』は、前漢武帝期まで存在した南越王國や東越王國を中國南方の異民族の象徴と捉え、兩粵王國の傳を立てている。一方、後漢時代の漢史を記す范曄『後漢書』は、後漢時代の中國南方の異民族を南蠻西南夷列傳の南蠻部分、すなわち「南蠻傳」に集約し、その範疇は嘗ての南越王國の領域にとどまらず、より中原に近い長江中流域（荊州南部・益州東部）に至る廣範な領域にまたがっている。すなわち、同様に中原の王朝であっても、歴史的な變化によって、王朝側が残そうとする異民族の記録の領域性もまた變化するという、ごく当たり前の事實が浮かび上がるのである。

從來、中國古代の南方諸民族について、谷口房男に見られるように、民族史という視角から文献史料による後代への民族集團の流れを把握しようという試みは存在した<sup>②</sup>。しかし、その基礎史料が抱える領域性の變化そのものを検討することは、輕視されて來たと言わざるを得ない。

そこで、本稿では、『後漢書』が有するそれ以前の史書からの領域性の變化が、いかなる過程をもって生じたのかという問題を提起し、後漢時代の「南蠻」の領域における史的展開を検討することで、その一過程を明らかにしていきたい。

## 一、「南蠻傳」の領域性と問題點

### (一)「南蠻傳」の地理的範圍と疑問點

論を進める前に、まず「南蠻傳」とは、正式には范曄『後漢書』列傳七十六南蠻西南夷列傳の南蠻部分である。そして、本稿における領域性という用語は、對象の有する時間的範圍、地理的範圍を統括する意味で使用することを、あらかじめ確認しておきたい。

さて、その「南蠻傳」が扱う民族的範圍は、後漢における中國南方の異民族であり、地理的範圍は、現在の四川省・湖南省・廣東省・廣西チワン族自治州・ベトナム北半にまたがる。

しかしながら、扱う地理的範圍は廣大であるものの、その内容は、大きく四つの蠻夷が記録されるにすぎない。以下その四つと、それぞれの所在地域を示しておきたい<sup>③</sup>。

1, 長沙武陵蠻……長江中流域の中でも現在の湖南省南部、特に長江支流の澧水・漵水流域の武陵郡の蠻夷が中心的に記される。

2, 交阯部の蠻夷……嶺南、すなわち廣東、廣東省・廣西チワン族自治区・ベトナム北半にまたがる。特にベトナム方面の蠻夷が中心的に記される。

3, 巴郡南郡蠻……長江中流域の中でも現四川省東部から湖南省にまたがる。巴郡・南郡の蠻夷。後によって江夏郡に移住させられた蠻夷も含まれる。

4, 板楯蠻夷……現四川省北東部にまたがる。巴郡の蠻夷。

まず、地理的觀點からいえば、1・3・4は、いずれも長江流域の蠻夷であり、それらが一つの「南蠻傳」としてまとめられることは容易に納得し得る。一方、2の交阯部の蠻夷は、一般的に嶺南と呼ばれる南嶺山脈によって長江流域の地域と隔てられた別地域の蠻夷である。「南蠻傳」がもつ地理的範圍の基準の不明確さが氣にかかる。

なぜ、氣にかかるかと言えば、『後漢書』は、南蠻西南夷列傳として「南蠻傳」と西南夷傳を中國南方の異民族の列傳としてまとめつつも、その中で、傳を區分しているからである。また、益州という兩漢の行政區畫の中には、南蠻と西南夷がともに含まれており、西南夷も南蠻の交阯部の蠻夷も、どちらも中國から見た場合に僻遠の地の異民族である。であるならば、長江流域の蠻夷と、嶺南の蠻夷を別個の異民族として分類しなかった理由こそ検討されるべきではあるまいか。

ここに、「南蠻傳」において、地理的要素を無視して四種の蠻夷がまとめられた背景を明らかにする必要性が認めら

れるのである。

(二)『史記』・『漢書』の兩粵傳から「南蠻傳」に至る疑問點

前漢中葉・後漢初期にそれぞれ編纂された司馬遷『史記』・班固『漢書』は、周知のごとく、どちらも前漢時代の歴史を記すという點で共通している。

その『史記』が、南方の異民族として配列した列傳は、南越・東越・西南夷の列傳であった。一方、『漢書』は、『史記』においてそれぞれ別個であったものを、西南夷兩粵朝鮮列傳としてまとめてしまう。しかし、その兩粵傳の内容は、『史記』をほぼ踏襲している。すなわち、『史記』・『漢書』は、西南夷を除くと、兩粵王國（便宜上、以下『史記』の南越・東越も含めて兩粵とする）を中國南方の異民族の象徴と認めたのである。

ところで、編纂時期上、『史記』が武帝期の兩粵滅亡に兩粵地域の記録を止めることは、當然であろう。しかし、『漢書』は、王莽の篡奪による前漢滅亡までの一時代を記すうえ、兩粵王國の滅亡以降も、僭耳・珠崖の放棄など、その遺領における事件の記録が散見される。それでは、なぜ『漢書』は、兩粵王國の興亡のみに、その異民族性を象徴させたのであろうか。その理由には、『漢書』が、後漢時代と異なり、兩粵王國の滅亡を以て南方の異民族の世界が消滅したという世界観があったと思われる。

それでは、『後漢書』の「南蠻傳」にはいかなることが言えるであろうか。『漢書』に遅れること劉宋期に編纂された范曄『後漢書』は、後漢時代の歴史をまとめている。その編纂年代こそ後漢時代から隔世の感があるものの、多く『東觀漢記』などの先行史料に依據していることはよく知られている。南蠻西南夷列傳も、それらをまとめて撰されたのである。

さて、その中でも基本的に西南夷傳は、『史記』・『漢書』以來の傳統があり、そうした點では、西南夷に別個の傳が立てられる動機は明快である。ところが、「南蠻傳」は、嘗ての南越王國の遺領を含むとはいえ、基本的には、『史記』・『漢書』の兩粵傳の地理的範圍を踏襲していない。

こうした『史記』・『漢書』の兩粵傳と『後漢書』の「南蠻傳」の領域差の問題點に注目したのが狩野直禎である。<sup>5)</sup>

狩野は、長沙・南郡における南越との抗争に着目し、特に後述するように、南郡にまで南越の勢力が及んでいた様子が見られることから、現在の湖南省地域は、すくなくとも前漢—南越並存時期において「漢越雜處の地」として、その境界は力關係によって大きく移動したのではないかとしたうえで、このことから『後漢書』南蠻傳に扱われる地理的範圍が、すでに『史記』・『漢書』の兩粵傳に潜在的に含まれているのではないかと推測した。首肯すべき見解であろう。

しかし、狩野は、二點の疑問について答えを見出し得なかった。

一つ目は、『史記』・『漢書』が、南方の異民族を理解する上で、なぜその大きな地理的範圍の中で兩粵王國のみに注目し、しかもその興亡に限定して記したのかという點。二つ目は、『後漢書』が、「南蠻傳」の枠組み、すなわちその領域性をどのようにして導き出したのかという點である。

この二點の疑問を同時に説明することは難しいものの、少なくとも二つ目については、後漢時代における長江流域から嶺南にかけての史的な展開を追跡することで説明し得るのではないかと考える。その可能性について、検討してみた。

### (三)「南蠻傳」の領域性

「南蠻傳」は、先述した四種の蠻夷について、時間的には傳説時代—後漢建國から後漢末までの様子を記し、地理的

には舊南越王國の遺領を含みつつも、それを遙かに超えて長江中流域、すなわち荊州南部・益州東部に至るまでを範圍としてゐることを確認した。この時間的範圍と地理的範圍を併せて領域性と表現するならば、「南蠻傳」の領域性の背景は何處に求められるべきであろうか。

『後漢書』が「南蠻傳」の領域性をどのようにして導き出したのかという疑問に對し、後漢時代における長江流域から嶺南にかけての史的な展開を追跡することで説明し得るのではないかという假定を提示したが、背景もまた、先述した手法によって明らかにし得るのではないだろうか。

『後漢書』が後漢時代の歴史を記す以上、その列傳は、范曄にとつての後漢時代通史を踏まえたうえで立てられたと考えるべきである。そうであるならば、「南蠻傳」の根底には、その地理的範圍である長江中流域と嶺南・ベトナムを結びつける歴史的要素があると考へねばなるまい。すると、長江中流域と嶺南・ベトナムとを結びつける地域、すなわち、後漢時代の交趾部と中原とを結びつける荊州南部の存在に力點を置いた檢證が可能となる。

そこで、次節において、「南蠻傳」の領域性を規定したと思われる長江中流域と嶺南・ベトナムを結びつける後漢時代の歴史的要素を檢討していきたい。

## 二、後漢における交趾部と荊州南部の關係

前漢時代、長江流域から嶺南にかけて展開された前漢と南越王國との九十年餘（「五世九十三歳」、『史記』卷百十三南越列傳）に及ぶ折衝は、武帝による南越王國討伐で幕を閉じた。その後、交趾部の九郡が開置され、その中でも儋耳・珠崖（現、海南島）の支配が放棄され、いわゆる交趾七郡（南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九眞・日南）となるもの

の、基本的には、この前漢に置かれた郡縣が後漢に踏襲されていく。また、本稿では、ほとんど觸れないものの、近年、吉開將人などに見られるように、嶺南地域史という観点から多くの出土文物を通じた分析が展開されている點は付言しておきたい。<sup>⑥</sup>

さて、後漢時代の交趾部の專論としては、H. マスペロが、先驅的な論考を示し、本邦では後藤均平が、ベトナム地域史という観点から交趾部における諸反亂を分析している。<sup>⑧</sup> また、尾崎康が、交趾に割據した後漢末の士氏に至る後漢の交趾部支配を分析している。<sup>⑨</sup>

尾崎康は、後漢から見た交趾部について、『後漢書』に見える交趾刺史のほとんどが現地での反亂征討のために派遣されたものであり、混亂を極める中央の政情から邊境の對策として、ただ反亂と鎮壓の惡循環を見送るより術がなかったと總括する。<sup>⑩</sup>

確かに、後漢側から見た交趾部は、珍品の供給據點であると同時に、不安定な一邊境地域にすぎなかったことは史料から伺える。また、同地域が慢性的に不安定化する最大の要因は、すでに諸先學が指摘する所の中央からの距離と、地方長官の收奪によるものであろう。

しかし、不安定ながらも後漢による交趾部支配が、その最末期まで繼續されている點は、改めて注目されるべきである。では、交趾部という邊境における後漢の支配は、なぜ存続されたのか。

その要因は、さまざまな視角から検討されるべきであるが、本稿は、特に交趾部と隣接する荊州南部との關係に注目する。なぜならば、長江中流域と嶺南という地理的に斷絶した地域が、「南蠻傳」という一個の枠組みにまとめられる背景が、そこにあると假定するからである。

以下、まずは前漢と南越王國との關係を簡單に確認し、後漢の交趾部と荊州南部との關係を、特に反亂とそれへの對



應に注目しながら順を追って検討していきたい。

(一) 前漢の南越討伐路—後漢時代前史—

さて、本稿としては、以下、『史記』卷一百一十三南越列傳に基づきながら、南越の興亡と、それに際しての荊州南部における前漢の動向を確認していきたい。

まず、同列傳に、

漢十一(前一九六)年、陸賈を遣はし因りて佗を立ちて南越王と爲し、剖符を與え使を通じ、百越を和集せしめ、南邊に患害を爲すこと毋く、長沙と境を接す。

(漢十一年、遣陸賈因立佗爲南越王、與剖符通使、和集百越、毋爲南邊患害、與長沙接壤。)

とあるように、當時、南越王國と接していた前漢の前線は、荊州南部にある長沙國にあった。ただ、抗爭地域は長沙に止まらず、南郡にまで達しており、むしろ南郡の方が漢側の被害が大きかったという<sup>②</sup>。その後、呂后が南越との鐵の交易を禁じると兩者は戰鬪状態に入り、文帝期には、趙佗が臣従の意思を表し、景帝期に入って朝貢したことで、ひとまず前漢と南越との關係は安定化する。

さて、こうした状況を見れば、少なくとも前漢初期には、長沙・南郡より南における前漢の支配がほとんど届いていなかったことは、明らかであろう。

先述したように、狩野直禎は、こうした荊州南部から南越にかけての地域を漢越の雜居地帯であったと推測したわけであるが、吉開將人は、前漢Ⅱ長沙王國と南越王國との中間地域において嶺南の諸勢力の歸屬をめぐる競合が發生していたことを明らかにしている<sup>③</sup>。

ところが、武帝期に入り、南越王國の開祖である趙佗が建元四（前一三七）年に亡くなると、形勢は前漢に大きく傾くことになる。趙佗の孫の趙胡が王位につくと、その隙を突いて東越が南越の邊境を攻撃する。この際、前漢は、趙胡に請われる形で南越と東越との抗争に介入し、結果、趙胡は息子の趙嬰齊を長安に人質として送り、前漢の影響力は増大することになる。趙胡の後を繼いだ趙嬰齊は、前漢から入朝を催促されたが、中國内地の諸侯と同格とされることを嫌い、入朝を拒否し續けたまま趙嬰齊は亡くなる。趙嬰齊は、人質として長安に滞在していた時に娶った邯鄲の穆氏の女を后としていたが、彼女との間にできた趙興が、次の南越王となる。ところが、趙興はまだ若く、彼の母、すなわち邯鄲の穆氏の女が太后となった。詳細は省くが、この太后は南越の國人から反感を買っていたため、前漢の權威に頼る道を選び、前漢からの趙興入朝の催促を受けいれることになる。

さて、同列傳には、以下のようにある。

元鼎四（前一三三）年、漢は安國少季をして往きて王・王太后を諭さしむるに入朝して内諸侯に比するを以てす。

辯士の諫大夫たる終軍等をして其の辭を宣べしめ、勇士の魏臣等をして其の缺を輔け、衛尉の路博德をして兵を將ゐるて桂陽に屯し使者を待たせしむ。

（元鼎四年、漢使安國少季往諭王・王太后以入朝比内諸侯。令辯士諫大夫終軍等宣其辭、勇士魏臣等輔其缺、衛尉路博德將兵屯桂陽待使者。）

前漢が趙興に入朝を促した際、路博德率いる部隊を桂陽に進出させている。前漢と南越の境界は、すでにこの頃には、間違ひなく桂陽郡周邊にまで南下していたのである。

話は戻るが、南越王趙興と太后が入朝を準備した段階で、反漢の立場である南越國丞相の呂嘉と彼らとの仲が決裂してしまふ。これに對して武帝が韓千秋率いる部隊を介入させて趙興と太后を掩護しようとするが、かえってこの行爲が

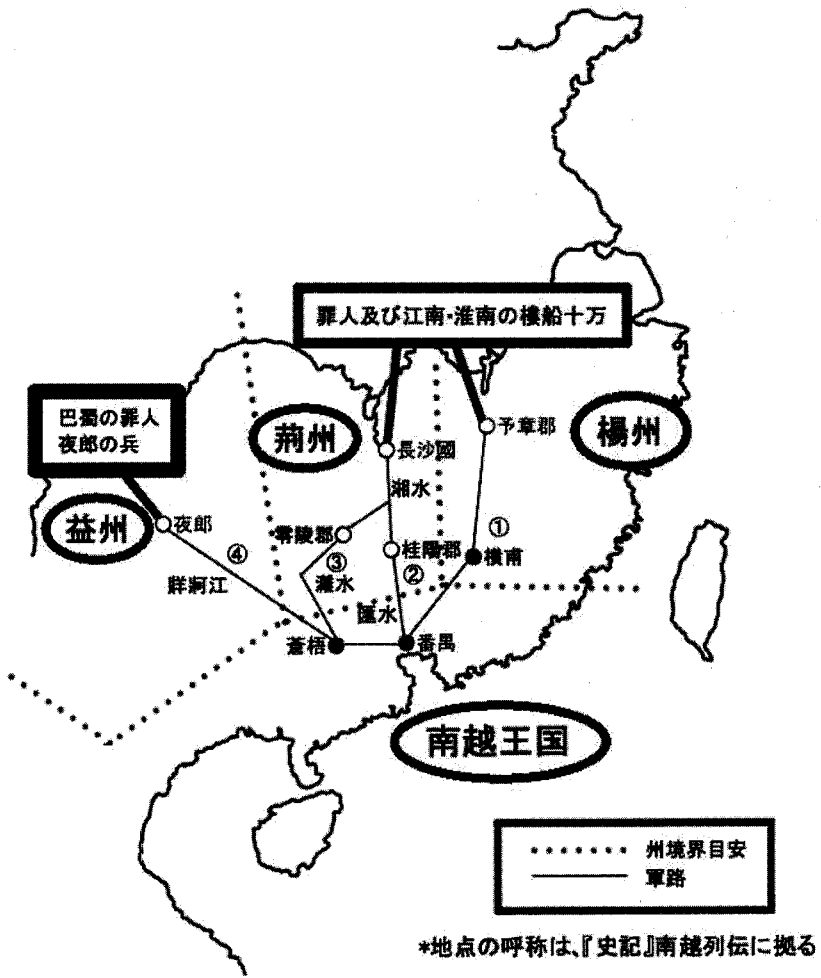


圖1 前漢の南越王國討伐路

呂嘉勢力の決起を促すことになる。

結果、呂嘉によって、趙興と太后、さらには南越に滞在していた漢の使者も殺害され、韓千秋の部隊までもが全滅してしまう。

そこで、武帝は元鼎五（前一一二）年、大規模な南越王國討伐を敢行する。その際、同列傳には、

乃ち赦を下して曰く、「天子微にして、諸侯力政するに、臣賊を討ぜざるを譏る。今呂嘉・建德等反き、自立して晏如たり。罪人及び江淮以南の樓船十萬の師をして往きて之を討たしむ」と。

（乃下赦曰、天子微、諸侯力政、譏臣不討賊。今呂嘉・建德等反、自立晏如。令罪人及江淮以南樓船十萬師往討之。）

とあり、各地の罪人と江南、淮南方面の樓船十萬が動員され、また、同列傳に、

元鼎五（前一一二）年秋、衛尉の路博德・伏波將軍と爲り、桂陽より出で、匯水を下り、主爵都尉の楊僕・樓船將軍と爲り、豫章より出で、横浦を下る。故歸義越侯の二人は戈船・下厲將軍と爲り、零陵より出で、或いは離水を下り、或いは蒼梧に抵る。馳義侯をして巴蜀の罪人に困り、夜郎の兵を發し、牂柯江を下らしむ。咸番馬に會す。

（元鼎五（前一一二）年秋、衛尉路博德爲伏波將軍、出桂陽、下匯水主爵都尉楊僕爲樓船將軍、出豫章、下横浦。

故歸義越侯二人爲戈船、下厲將軍、出零陵、或下離水、或抵蒼梧。使馳義侯因巴蜀罪人、發夜郎兵、下牂柯江。咸番馬。）

とあり、その軍路は、四路によって構成されていたことがわかる。その四路は、下記のように整理できよう（圖1）。

①衛尉路博德（伏波將軍）…桂陽から匯水（滙水）を下る。

②主爵都尉楊僕（樓船將軍）…豫章郡から横浦に下る。

③戈船將軍・下厲將軍…零陵から灑水を下り、蒼梧に進出。

④馳義侯…巴・蜀の罪人・夜郎の兵を率いて牂牁江を下る。

①、②、③、④は、最終的に番禺（現廣州）での合流を目指した。

結論から言えば、實際に戦闘に参加した兵力は①の路博徳と②の楊僕の部隊だけであった。③、④の兵力は結局作戦に間に合わなかったのである。また、①の路博徳は進軍に手こずって出遅れており、南越の都番禺までスムーズに進軍したのは、②の豫章ルートを下りした楊僕のみであった。

ところで、先述したように、前漢と南越との前線は、長沙・桂陽などの荊州南部であった。武帝が趙興への入朝を促す際、路博徳率いる部隊に待たせた據點も桂陽である。しかしながら、南越討伐に最も貢献したのは、揚州の豫章郡からのルートであった。

先ほどの討伐戦のところをもう少し詳細に見ておきたい。同列傳に、

元鼎六（前一一一）年冬、樓船將軍 精卒を將ゐて先ず尋陝を陥れ、石門を破りて越の船粟を得たり。因りて推して前み、越の鋒を挫き、數萬人を以て伏波を待つ。伏波將軍 罪人を將ゐ、道遠くして、會期に後れ、樓船と會するに乃ち千餘人有るのみ。逐に俱に進む。樓船 前に居り、番禺に至る。

（元鼎六年冬、樓船將軍將精卒先陷尋陝、破石門得越船粟。因推而前、挫越鋒、以數萬人待伏波。伏波將軍將罪人、道遠、會期後、與樓船會乃有千餘人。逐俱進。樓船居前、至番禺。）

とある。豫章から横浦を抜けた樓船將軍楊僕の部隊は、南越の船舶や兵糧を奪い、さらには南越の先鋒を打ち破りながら、數萬人という規模の部隊を維持しつつ番禺での決戦に臨むのである。一方、桂陽から進出した路博徳の部隊は、相

當な損失を強いられながら楊僕の部隊と合流したことがうかがわれる。それでは、なぜ兩ルートの間にかような差が生じたのであろうか。

右記史料は、路博徳の部隊の遅れと損失の要因として、構成員の質の問題と、距離的な問題をあげている。氣になるのは、距離的な問題である。

なぜならば、後述するが、後漢時代においても豫章ルートが利用されていた可能性はあるが、基本的には、後漢時代において史料上に頻出する中原と嶺南を結ぶ経路は、南越討伐において苦戦し、豫章と比べて「道遠」しと表現された荊州南部からのルートなのである。

この現象の背景には、交阯部における後漢の實質的支配がベトナム方面に向けて擴大するという、後漢時代以降の交阯部支配の變質があると思われる。

そこで、後漢時代における交阯部と荊州南部の關係を順次検討していきたい。

## (二) 後漢初期の關係

### ① 對公孫述戰略

前漢が王莽の篡奪によって滅びた後、光武帝による統一に至るまで各地で羣雄が割據するが、その過程で交阯部もまた中原からの支配が届かなくなっていた。『後漢書』本紀 光武帝紀上 建武五（二九）年に、

交阯牧の鄧讓 七郡の太守を率ゐ使を遣はして奉貢す。

（交阯牧鄧讓率七郡太守遣使奉貢。）

とある。交阯部を掌握していたと思われる交阯牧の鄧讓が、ようやく統一事業の過程にあった光武帝に臣従することに

なる。

注意を要するのは、光武帝の天下統一が決定的となったために、鄧讓が來貢したわけでは無いという點である。『後漢書』列傳七 岑彭傳に、

彭は以て將に蜀漢を伐たんとするも、而るに川を夾みて穀少く、水險にして漕運に難し。威虜將軍の馮駿を留めて江州に軍せしめ、都尉の田鴻を夷陵に軍せしめ、領軍の李玄をして夷道に軍せしめ、自ら兵を引きて還りて津郷に屯し、荊州の要會に當たり、諸蠻夷に諭告すらく、降者は奏して其の君長を封ぜんと。初め彭は交阯牧の鄧讓と厚善なれば、讓に書を與へて國家の威徳を陳べ、又偏將軍の屈充を遣はして檄を江南に移し、詔命を班行せしむ。是に於て讓は江夏太守の侯登・武陵太守の王堂・長沙相の韓福・桂陽太守の張隆・零陵太守の田翕・蒼梧太守の杜穆・交阯太守の錫光等と相ひ率ゐて使を遣はして貢獻し、悉く封じて列侯と爲す。或いは子を遣はして兵を將ゐて彭の征伐を助けしむ。是に於て江南の珍始めて流通せり。

（彭以將伐蜀漢、而夾川穀少、水險難漕運。留威虜將軍馮駿軍江州、都尉田鴻軍夷陵、領軍李玄軍夷道、自引兵還屯津郷、當荊州要會、諭告諸蠻夷、降者奏封其君長。初彭與交阯牧鄧讓厚善、與讓書陳國家威徳、又遣偏將軍屈充移檄江南、班行詔命。於是讓與江夏太守侯登・武陵太守王堂・長沙相韓福・桂陽太守張隆・零陵太守田翕・蒼梧太守杜穆・交阯太守錫光等相率遣使貢獻、悉封爲列侯。或遣子將兵助彭征伐。於是江南之珍始流通焉。）

とある。光武帝は、巴蜀の公孫述集團に對し、岑彭に荊州方面からの攻撃を命じる。命を受けた岑彭は、夷陵に據っていた田戎を蜀に追い立て、長江流域の要衝を制壓して行った。同時に、交阯牧の鄧讓を通じて荊州の長江流域から交阯部にいたる郡を掌握していったのである。

本稿では、「彭は以て將に蜀漢を伐たんと」した文脈で、交阯牧の鄧讓を通じて荊州の長江流域から交阯部にいたる

郡を掌握したことが重要であると考へたい。つまり、荊州方面からの對公孫述戰略が展開される中で、中央と交趾部との關係が恢復したのである。荊州制壓と巴蜀攻略を狙う過程で、岑彭が交趾部掌握の必要性を認識したことは注目すべき現象であろう。

## ② 徵姉妹の亂

徵姉妹の亂とは、後漢初期の光武帝期の建武十六（三六）年に現ハノイの交趾で起きた反亂である。この事件については、H・マスペロが先驅的論考を提出しており、本邦では後藤均平がこれに據りながら詳細な專論によって續いている。<sup>20</sup>

徵姉妹の亂を確認する前に、先に交趾牧の鄧讓が光武帝に臣従してからの交趾部の様子を見ておくと、彼らの交趾部支配は、一見安定したかのような記事が見える。<sup>21</sup>しかし、その後、數年も経たない建武十六（四〇）年、徵姉妹の亂が交趾において起こるのである。『後漢書』光武帝紀下の記事を示しておくと、

（建武）十六（四〇）年春二月、交趾の女子の徵側反き、城邑を略有す。

（十六年春二月、交趾女子徵側反、略有城邑。）

とある。この交趾部の交趾で起きた反亂に光武帝は、討伐軍を繰り出す。『後漢書』列傳十四 馬援列傳によれば、

又交趾の女子の徵側及び女弟の徵貳反き、其郡を攻没す。九眞・日南・合浦の蠻夷皆な之に應じ、嶺外の六十餘城を寇略し、側自ら立ちて王と爲る。是に於て璽書もて援を伏波將軍に拜し、扶樂侯の劉隆を以て副と爲し、樓船將軍の段志等を督して南のかた交趾を撃たしむ。軍合浦に至りて志病もて卒し、援に詔して并せて其の兵を將ゐせしむ。



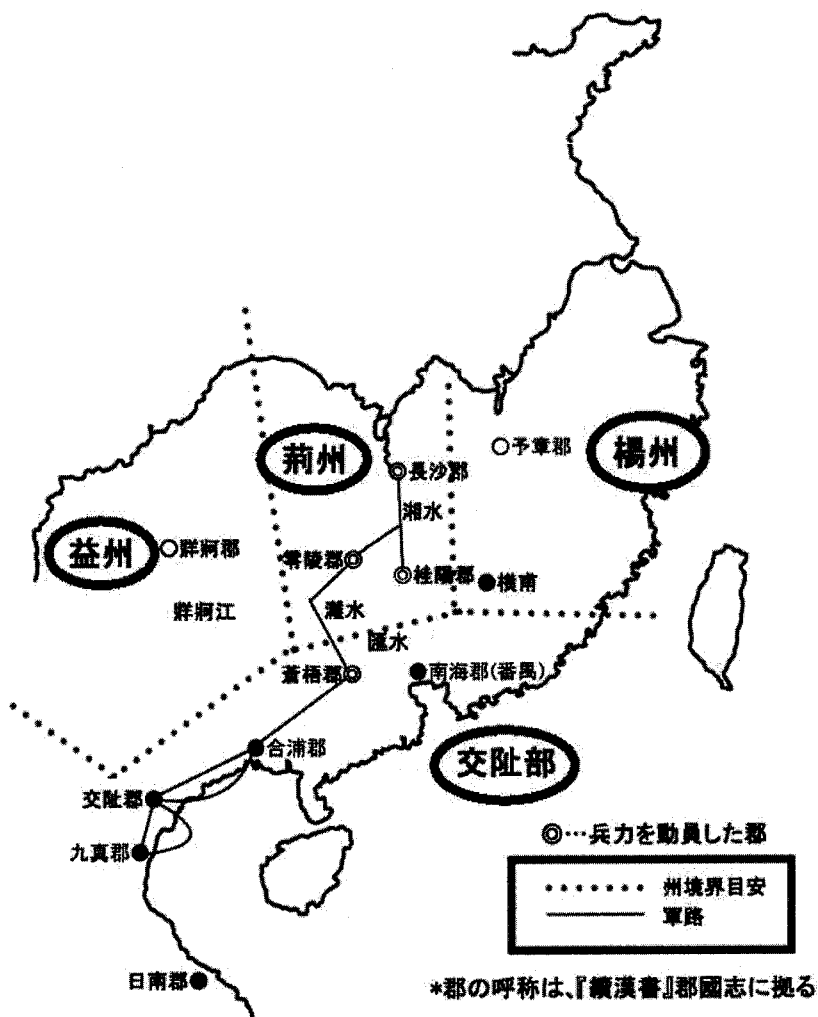


圖2 後漢の徵姉妹討伐路

(又交阯女子徵側及女弟徵貳反、攻沒其郡。九眞・日南・合浦蠻夷皆應之、寇略嶺外六十餘城、側自立爲王。於是鹽書拜援伏波將軍、以扶樂侯劉隆爲副、督樓船將軍段志等南擊交阯。軍至合浦而志病卒、詔援并將其兵。)

とあり、反亂の範圍は交阯から九眞・日南・合浦と、ベトナム北半に渡って擴大してしまふ。この反亂に對し、馬援は伏波將軍として、樓船將軍の段志等とともに討伐軍を率いて交阯部に進軍するのである(圖、2)。

ところで、その軍路を見てみると、「南蠻傳」に、

交阯刺史及び諸太守、僅かに自守するを得るのみ。光武乃ち長沙・合浦・交阯に詔して車船を具へ、道橋を修め、障谿を通じ、糧穀を儲ふ。(建武)十八(四二)年、伏波將軍馬援・樓船將軍段志を遣はし、長沙・桂陽・零陵・蒼梧兵萬餘人を發して之を討たしむ。

(交阯刺史及諸太守僅得自守。光武乃詔長沙・合浦・交阯具車船、修道橋、通障谿、儲糧穀。十八年、遣伏波將軍馬援・樓船將軍段志、發長沙・桂陽・零陵・蒼梧兵萬餘人討之。)

とある。まず、長沙―合浦―交阯において、それぞれ軍路が整備され、長沙・桂陽・零陵・蒼梧で動員された兵力が上記軍路を通じて交阯に結集したことがわかる。

その後、「南蠻傳」によれば、

明(四三)年夏四月、援交阯を破り、徵側・徵貳等を斬り、餘は皆な降散す。進みて九眞の賊の都陽等を撃ち、破りて之を降す。其の渠帥三百餘口を零陵に徙す。是に於て領表悉く平ぐ。

(明年夏四月、援破交阯、斬援側、援貳等、餘皆降散。進擊九眞賊都陽等、破降之。徙其渠帥三百餘口於零陵。於是領表悉平。)

とある。徵姉妹を討ち取った馬援は、九眞郡まで進軍して反亂を平定、在地の豪族「三百餘口」を零陵に移住させたと

いう。この措置は、零陵が荊州南部と交阯部を結ぶ結節點であることが背景にある。

さて、①の建國戰爭においては、光武帝の對公孫述戰略の過程で、後漢が交阯部の支配を恢復したことを確認した。また、②の徵姉妹討伐においては、後漢が交阯部に干渉していく場合に、長沙—合浦—交阯という荊州から交阯に連なるラインが利用されたこと、さらには長沙・零陵・桂陽・交阯の兵力が動員されたことを確認した。

ところで、H. マスペロは、この徵姉妹の亂を討伐した馬援の軍政により、世襲の土着酋長層が没落したとしている。さらに、後藤均平は、一連の出來事を、郡縣官僚—土着漢人支配層—土着民からなる複合的社會に變換する越南古代史上の晝期と位置づけている。

その説を前提として見た場合に、後漢のベトナム地域に對する本格的進出を支えたのは、その規制力の根據となる軍事を供出した荊州南部と見るべきであろう。端的に言えば、①、②の現象は、荊州南部が、交阯部における後漢の支配擴大を保證したことを意味するのである。

### (三) 後漢中葉の關係

後漢中葉の和帝期、永和年間（一二六—一四一）に至ると、後漢による交阯部支配は、極めて困難な局面に陥る。交阯部の最南端である日南郡で起きた反亂の擴大に對し、後漢の交阯部支配の轉機と見るべき議論が展開された。以下、長文ではあるが、「南蠻傳」の一文を確認しておきたい。

永和二（一二七）年、日南の象林の徼外における蠻夷の區隣等 數千人 象林縣を攻め、城寺を燒き、長吏を殺す。交阯刺史の樊演 交阯・九眞二郡の兵 萬餘人を發し之を救はんとす。兵士 遠役を憚り、遂に反き、其の府を攻む。二郡 反者を擊破すると雖も、而れども賊執 轉た盛んなり。會 侍御史の賈昌 使して日南に在り、即ち州郡と力

を并せて之を討つも、利あらず、遂に攻むる所と爲る。

圍むこと歳餘にして兵穀繼がず、帝以て憂ひと爲す。明（一三八）年、公卿百官及び四府の掾屬を召し、其の方略を問ふ。皆な議すらく、大將を遣はし、荊・楊・兗・豫の四萬人を發して之に赴かしめんと。

大將軍從事中郎の李固駁して曰く、若し荊・楊事無ければ、之を發するも可なり。今二州の盜賊槃結して散ぜず、武陵・南郡の蠻夷未だ輯まらず、長沙・桂陽數々徵發せられ、如し復た擾動せば、必ず更に患ひを生ぜん。其その不可なるの一なり。又兗・豫の人卒徵發せられ、遠く萬里に赴き、還期有る無く、詔書もて迫り促せば、必ず叛亡するに致らん。其の不可なるの二なり。……直しく更めて勇略仁惠有りて將帥に任ゆる者を選び、以て刺史、太守と爲し、悉く共に交趾に住まらしむべし。今日南の兵單きて穀無く、守は既に足らず、戰ふこと又能はず。一切に其の吏民を徙して北のかた交趾に依らしめ、事靜まりしの後、又命して本に歸らしめ、還りて蠻夷を募り、自ら相ひ攻めせしめ、金帛を轉輸し、以て其の資と爲す可し。……

四府悉く固の議に従ひ、即ち祝良を拜して九真太守と爲し、張喬を交趾刺史と爲す。……是れ由り嶺外復た平ぐ。

（永和二年、日南象林徼外蠻夷區憐憐等數千人攻象林縣、燒城寺、殺長吏。交趾刺史樊演發交趾・九真二郡兵萬餘人救之。兵士憚遠役、逐反、攻其府。二郡雖擊破反者、而賊執轉盛。會侍御史賈昌使在日南、即與州郡并力討之、不利、遂爲所攻。

圍歲餘而兵穀不繼、帝以爲憂。明年、召公卿百官及四府掾屬、問其方略。皆議、遣大將、發荊・楊・兗・豫四萬人赴之。

大將軍從事中郎李固駁曰、若荊・楊無事、發之可也。今二州盜賊槃結不散、武陵・南郡蠻夷未輯、長沙・桂陽數

被徵發、如復擾動、必更生患。其不可一也。又兗・豫之人卒被徵發、遠赴萬里、無有還期、詔書督促、必致叛亡。其不可二也。……宜更選有勇略仁惠任將帥者、以爲刺史、太守、悉使共住交阯。今日南兵單無穀、守既不足、戰又不能。可一切徙其吏民北依交阯、事靜之後、又命歸本、還募蠻夷、使自相攻、轉輸金帛、以爲其資。……

四府悉從固議、卽拜祝良爲九真太守、張喬爲交阯刺史。……由是嶺外復平。

永和二（一三七）年に起きた日南郡の反亂は、郡縣の支配圏外からの攻撃であった。この攻撃に對し、交阯刺史が交阯郡・九真郡の兵を動員するが、かえってこれが遠征への負擔を危惧した郡兵による反亂を誘發してしまふ。結局、郡兵の反亂は平定されたものの、これによつて交阯部は日南郡に對する救援能力を失ひ、日南郡が孤立してしまふ。そこで、後漢中央は「四萬人」を動員しての遠征軍派遣を試みるが、議論段階で頓挫する。

右記史料の大半は、その際の李固による軍事介入策への反論であるが、その最大の根據を、「荆・楊」という長江中下流域の不安定化に求めている。

さらに李固は、荊州と楊州の中でも特に、「武陵・南郡の蠻夷 未だ輯まらず、長沙・桂陽 數々徵發せられ、如し復た擾動せば、必ず更に患ひを生ぜん」とあるように、荊州南部における蠻夷の反亂と徵發による疲弊をより強調しているのである。

後漢政府が荊州南部の混亂によつて軍事介入策の撤回とそれに代わる苦澁の代替案を餘儀なくされた様子を見て取れよう。すなわち、永和年間の事態は、荊州南部が混亂に陥れば、交阯部の中でも、とりわけベトナム地域に對する後漢の規制力が失われることの證明となるのである。

(四) 後漢後期の關係

① 延熹年間の反亂

これまで交趾部で起きた反亂は、徵姉妹の亂に始まりベトナム地域が主要な舞臺となっていた。しかし、延熹年間の反亂は著しく地域が異なり、荊州と接する交趾部北部すなわち嶺南が主要な舞臺となる。

『後漢書』桓帝紀 延熹五（一六二）年には、

夏四月、長沙の賊起ち、桂陽・蒼梧を寇す。

……長沙・零陵の賊起ち、桂陽・蒼梧・南海・交趾を攻む。御史中丞の盛脩を遣はして州郡を督して之を討たしむるも、克たず。

……文縣の賊 長沙の郡縣を焚燒し、益陽を寇し、令を殺す。又零陵蠻も亦た叛き、長沙を寇す。

……冬十月、武陵蠻 叛き、江陵を寇し、南郡太守の李肅 奔り北るるに坐して弃市せらる。辛丑、太常の馮緄を以て車騎將軍と爲し、之を討つ。

……十一月、馮緄 叛蠻を武陵に大いに破る。

(夏四月、長沙賊起、寇桂陽・蒼梧。

……長沙・零陵賊起、攻桂陽・蒼梧・南海・交趾。遣御史中丞盛脩督州郡討之、不克。

……文縣賊焚燒長沙郡縣、寇益陽、殺令。又零陵蠻亦叛、寇長沙。

……冬十月、武陵蠻叛、寇江陵、南郡太守李肅坐奔北弃市。辛丑、以太常馮緄爲車騎將軍、討之。

……十一月、馮緝大破叛蠻於武陵。

とそれぞれある。荊州南部の長沙で發生した反亂が、僅かな期間に交趾部北部にまで南下する様子が見て取れよう。また、上記の「夏四月、長沙賊起、寇桂陽・蒼梧」の李賢注所引の「東漢記」には、

時に蒼梧を攻没し、銅虎符を取り、太守の甘定・刺史の侯輔 各々奔りて城を出す。

(時攻没蒼梧、取銅虎符、太守甘定・刺史侯輔各奔出城。)

とあり、かなり早い段階で荊州と交趾部を結びつける蒼梧郡が陥落し、太守と交趾刺史が逃走していることがわかる。そのうえ、「銅虎符」が奪われており、兵の動員権が機能しなかったことを示している。このことは、荊州方面からの動亂を受けた場合に、交趾部の郡單獨では、對處が極めて困難であったことを物語っている。

上記の反亂は一時的に平定されるが、混亂はこれで終わらず、反亂はすぐに再燃する。『後漢書』桓帝紀 延熹八(一六五)年によれば、

桂陽の胡蘭・朱蓋等復た反き、郡縣を攻没し、轉じて零陵を寇す。零陵太守の陳球之を拒ぐ。中郎將の度尙・長沙太守の抗徐等を遣はして蘭・蓋を撃たしめ、大いに破りて之を斬る。蒼梧太守の張紘賊の執ふる所と爲る。又桂陽太守の任胤 敵を背にして畏懼いそなれば、皆な弃市せらる。

(桂陽胡蘭・朱蓋等復反、攻没郡縣、轉寇零陵。零陵太守陳球拒之。遣中郎將度尙・長沙太守抗徐等擊蘭・蓋、大破斬之。蒼梧太守張紘爲賊所執、又桂陽太守任胤背敵畏懼、皆弃市。)

とあり、桂陽郡で再燃した反亂に對して、荊州南部の零陵郡が粘り、中央からの増援と連携して賊を撃破した様子が見て取れよう。零陵とは對照的に、交趾部の蒼梧郡は、再び陥落するにとどまらず、太守が賊に捕らわれてしまふ。

この一連の事件から、中央との連絡線を保つ荊州南部の郡が持ちこたえる一方で、荊州側から中央と遮斷された交趾

部の郡の弱さが際立っていると認めざるを得まい。

延喜年間の一連の事件は、荊州南部が、交趾部における後漢の規制力を保證していたことを逆説的に證明しているのである。

## ② 光和年間以降の展開

ここまで、交趾部における後漢の支配が荊州南部によって保證され、荊州の混亂とともに後漢の交趾部への規制力が確實に失われていく様子を確認した。そして、後漢の交趾部支配に、より衝撃的な轉換點を求めるとすれば、光和元年（二七八）年の反亂を確認しておく必要がある。まず「南蠻傳」に、

光和元年、交趾・合浦の烏潯蠻反叛し、九眞・日南を招誘して數萬人を合し、郡縣を攻没す。（光和）四（一八一）年、刺史の朱儁之を撃ち破る。

（光和元年、交趾・合浦烏潯蠻反叛、招誘九眞、日南合數萬人、攻没郡縣。四年、刺史朱儁擊破之。）とあるように、蠻夷の反亂が交趾・合浦から九眞・日南に至る廣範圍に擴大した。しかし、範圍が明らかに上記に止まらないうえ、單なる蠻夷の反亂の域を超えていることが以下の『後漢書』列傳六一 朱儁傳に明らかである。

たまたま 會交趾部の羣賊 並び起ち、牧守 輒弱にして禁むること能はず。又交趾の賊の梁龍等萬餘人、南海太守の孔芝と反叛し、郡縣を攻破す。光和元年、即ち儁を交趾刺史に拜し、過りし本郡をして簡募せし家兵及び調する所、五千人を合せ、分ちて兩道に従ひて入る。既に州界に到るや、甲を按じて前まず、先ず使を遣はして郡に詣らしめ、賊の虛實を觀し、威徳を宣揚し、以て其の心を震動せしむ。既にして七郡の兵と與に俱に進みて之に逼り、遂に梁龍を斬り、降者は數萬人、旬月にして盡く定む。



(會交阨部羣賊竝起、牧守輒弱不能禁。又交阨賊梁龍等萬餘人、與南海太守孔芝反叛、攻破郡縣。光和元年、即拜  
儁交阨刺史、令過本郡簡募家兵及所調、合五千人、分從兩道而入。既到州界、按甲不前、先遣使詣郡、觀賊虛實、  
宣揚威德、以震動其心。既而與七郡兵俱進逼之、遂斬梁龍、降者數萬人、旬月盡定。)

とある。この史料で衝撃的な點は二點ある。

まず一點目は、官僚である南海太守が反亂に荷擔し、中央に對して明白に抵抗している點である。荊州の不安定さから後漢の交阨部に對する規制力が失われると同時に、權威までもが大きく損なわれていたのである。

そして、二點目は、この反亂の討伐を委ねられた交阨刺史の朱儁が、家兵などからなる自らの私兵を中核として、兩道から交阨部に乗り込んだ點である。

この兩道、すなわち二つの軍路が、どの經路をたどったのか詳細は不明である。しかし、少なくとも一つは、前漢南越の都である番禺を陥れた実績を持つ豫章郡—横甫—番禺(南海郡の治所)ルートであった可能性が高い。なぜならば、「過りし本郡をして簡募せし家兵及び調する所」と、朱儁が本郡で兵を集めているからである。

朱儁の本貫は楊州の會稽郡であり、そこで兵力を動員していることは、距離的な問題から豫章ルートである第一の理由としてあげられる。さらに、反亂側において太守が裏切った南海郡(番禺)の役割が小さくないことから、會稽から番禺に至るルートとしてこの推測は決して的外れではあるまい。

また、時系列的に十數年以上も後のことであるが、朱儁の息子である朱符・朱皓兄弟がそれぞれ交阨刺史、豫章太守となつていることから、朱儁の進軍以降、交阨部—豫章ラインに、朱氏のなにかの影響が醸成されたと考えるのは、理に適わぬことではあるまい。

官僚である南海太守が反亂に荷擔し、それを討伐したのは、朱儁の私兵と在地の兵力である交阨部の郡兵であった。

後漢中央の權威が大きく損なわれていることは疑うべくもない。中平元（一八四）年、今度は交阨の「屯兵」が反亂を起こし、その兵のリーダーであろう何者かが「柱天將軍」を稱すると、交阨刺史の賈琮がほとんど武力を用いずにこれを平定する（『後漢書』列傳二十一 賈琮傳）。だが、さらに同年の黃巾の亂、その後の中央情勢の不安定が、交阨部における後漢の規制力を確實に減退させていったことは疑いあるまい。

荊州南部の不安定化により、後漢の交阨部に對する規制力は失われた。荊州南部が安定しないことには、中央が直接交阨部に介入することは不可能となつたのである。

#### (五) 後漢末の様相

##### ① 劉表と士燮

交阨部における後漢の規制力を保證した荊州南部の混亂は、當然ながら交阨部におけるさらなる後漢の權威の低下を招いた。そうした中で、後漢の支配を軸として展開してきた荊州南部と交阨部の關係は、ともにその變質を受けいれざるを得なくなる。

極言すれば、後漢末の荊州南部・嶺南における動向は、荊州中部を抑えた劉表による膨張策と、それを抑えようとする朝廷の戰略の對立を軸として展開する。特に轉換期は、劉表の膨張策と朝廷の對抗策が交阨部において衝突した興平（一九四～一九五）年間に求められよう。

そうした點において、荊州における劉表の膨張策を分析する満田剛と<sup>(28)</sup>、交阨部における士燮臺頭の過程を分析する川手翔生は、ともに参照すべき先行研究である。以下の劉表と士燮にまつわる一連の流れは、基本的に兩者に依據することをあらかじめ明示しておきたい。

獻帝期の興平年間に在任した交阯刺史の朱符と豫章太守の朱皓は、ともに劉表の膨張策に對抗する形で朝廷から派遣されたものである<sup>(31)</sup>。しかしながら、両者は、あえなく殺害されてしまう<sup>(32)</sup>。さらに、朱符の後繼である張津も、劉表への對抗として朝廷から派遣されている。

交阯刺史を拜命した張津は、長沙・零陵・桂陽の湘水流域を掌握した張羨と共同戦線を張って劉表に對抗する。しかし、建安五（二〇〇）年頃には、張羨が病死し、劉表により荊州南部が制壓される<sup>(33)</sup>。

結局、劉表に對抗した交州刺史（この時点で交阯部は州に格上げされている<sup>(34)</sup>）の張津は、部下に殺されてしまう<sup>(35)</sup>。そのため、劉表はさらに、交阯部との結節点である蒼梧郡に部下の頼恭、吳巨をそれぞれ交州刺史、蒼梧太守として送り込み、交阯部北邊まで勢力を擴張する。

こうした劉表の膨張に對し、朝廷は、すでに朱符が殺された際に交阯・合浦・九眞・南海四郡を掌握していた士燮に、州牧に匹敵する権限を與えることで、劉表の膨張策に對抗するのである<sup>(36)</sup>。

結局、建安十三（二〇八）、荊州の南平と蒼梧郡まで制壓した劉表は、朝廷を擁する曹操の南下と同時に病没し、劉表による荊州方面からの交阯部への干渉は停止する（『魏志』卷一 武帝紀）。その後、劉表のもとで動いていた吳巨は、士燮に驅逐され、その士燮も建安十五（二一〇）年には、孫權が交州刺史として派遣した歩騭に降ることになるのである（『吳志』卷四十九 士燮傳）。

## ②劉表の覇權的姿勢と岑彭の戰略

ところで、先述の滿田剛は、後漢末の劉表の立場を端的に示す史料として下記の『後漢書』列傳五十四 趙岐傳を引いている。

興平元年（一九四）年、詔書もて岐を徵す。帝の當に洛陽に還るべきに會し、先だちて衛將軍の董承を遣はして宮室を修理せしむ。岐承に謂ひて曰く、今海内分崩す。唯だ荊州有りて境は廣く地は勝れ、西は巴蜀に通じ、南は交趾に當り、年穀獨り登り、兵人差や全し。岐は大命に迫らると雖も、猶ほ國家に報ゐんと志す。自ら牛車に乗り、南のかた劉表を説かんと欲す。其れをして身自ら兵を將ゐて來りて朝廷を衛らしむ可く、將軍と心を并せ力を同じくして、共に王室を獎けん。此れ上を安んじ人を救ふの策なりと。

（興平元年、詔書徵岐。會帝當還洛陽、先遣衛將軍董承修理宮室。岐謂承曰、今海内分崩。唯有荊州境廣地勝、西通巴蜀、南當交趾、年穀獨登、兵人差全。岐雖迫大命、猶志報國家。欲自乘牛車、南說劉表。可使其身自將兵來衛朝廷、與將軍并心同力、共獎王室。此安上救人之策也。）

先に董卓等とともに長安に遷都していた獻帝が洛陽に歸還しようとした際、召し出された趙岐は、董承に對し、荊州の劉表に支援を要請することを提言した。この提言において、注目すべきは、「西は巴蜀に通じ、南は交趾に當る」の一節で、長江水系を通じて東西南北に連なる要衝である荊州を端的に表現している。

本稿としても、この史料には注目せざるを得ない。この荊州に對する認識は、後漢建國期、公孫述討伐のために荊州方面からの攻勢を目指し、そのために交趾部の支配を恢復した岑彭の戦略に端を發していることは明らかである。

後漢初期に確立された荊州に對する認識と交趾部への規制力の展開は、後漢末に至ってもなお諸勢力の戦略を規定していたと言えよう。

## まとめ

さて、狩野直禎は、長江中流域から嶺南に至る廣大な「南蠻」というイメージが、『史記』・『漢書』の兩粵傳に潜在的に含まれていると推測したことは先に述べた。しかしながら、『史記』・『漢書』の表現はあくまで兩粵王國の興亡に限定されており、狩野は、『後漢書』が、「南蠻傳」の枠組み、すなわちその領域性をどのようにして導き出したのかという点を明らかにしていなかった。

だが、その答えは、後漢時代の荊州南部と交阯部との關係に着目すれば自ずと理解できよう。すなわち、荊州南部が交阯部における後漢の支配を保證するという關係と、その關係を恢復しようという一時代を通じた試みが、長江中流域と嶺南・ベトナムを一體的に捉える枠組みを、范曄『後漢書』の「南蠻傳」に提供したのである。

本稿では、「南蠻傳」という基礎史料の偏向を示し得る一要素として、その領域性に注目して検討を重ねた。ここまです後漢時代の史的展開が、『後漢書』の列傳である「南蠻傳」の領域性を規定する重要な要素であることを明らかにした。しかしながら、その分析は、後漢時代史の分析に止まり、狭小の譏りは免れ得まい。特に「南蠻傳」の背景となった劉宋期の王朝と蠻夷との關係が明らかにされなければ、この問題は片手落ちとならう。その点については今後、さらに検討を重ねていきたい。

## 注

(1) 『後漢書』の全體像については、吉川忠夫譯注『後漢書』第一冊(岩波書店、二〇〇一年)、渡邊義浩・岡本秀夫・池田雅典編『全譯後漢書』第一冊(汲古書院、二〇〇一年)それぞれ所收の解題などを参照。

(2) 谷口房男『華南民族史研究』(綠蔭書房、一九九六年)。同『續華南民族史研究』(綠蔭書房、二〇〇六年)は、特に後漢以降の中國南方の諸民族の時系列的な體系化を試みた本邦における先驅と言えよう。また、少數民族研究という点においては、特に現代中國における研究が盛んであるが、その量は膨大であり、今後の研究整理を通じて紹介していきたい。ただ、槃瓠傳説關係に

については、すでに拙稿『後漢書』の槃瓠傳説と『風俗通義』(『大東文化大學中國學論集』二九、二〇一一年)を、板楯蠻關係については、拙稿『後漢書』に見える板楯蠻の史的背景(豫定)を用意している。

(3) 筆者が、すでに「南蠻傳」に關して、1について、特にその開祖傳説である槃瓠傳説について検討した論考があり、4についても前掲別稿を豫定していることは付言しておきた。

(4) 『漢書』卷九元帝紀 初元(前四六)年に、「珠厓郡山南縣反、博謀羣臣。待詔賈捐之以爲宜棄珠厓、救民饑饉。乃罷珠厓」とある。なお、この時點で儋耳郡は珠厓(珠崖)に統合されていた。

(5) 狩野直禎「後漢書南蠻傳小考」(『史窓』三三、一九七四年)。

(6) 秦漢期の嶺南・ベトナム史の概観は、吉開將人「歴史世界としての嶺南・ベトナム―その可能性と課題―」(『東南アジア歴史と文化』三一、二〇〇二年)を参照。なお、嶺南・ベトナムの歴史は、秦の象林郡の設置が、その端緒として從來把握されてきた。しかし、H. マスペロ以降の論説や考古學上の成果により、秦の領域はベトナム方面に達していなかったことが確認されつつあると言つ。その上で吉開は、むしろ南越王國に、廣東から北ベトナムに至る歴史世界の形成の端緒を求めている。南越建國の過程については、和田清「南越建國の始末」(『史林』二六一、一九四一年)等を参照。

(7) H. Maspero, *Etudes d'histoire d'Annam*, IV: Le royaume de Van-lang, VI: l'expédition de Ma Yuan, BEFEO XVIII, 1-910.

(8) 後藤均平「後漢書所見越南三郡反亂記事小考(上)」(『人文科學研究』三三、新潟大學人文學部、一九六七年)・同「二世紀の越南」(『史苑』三一、一九七一年)。

(9) 尾崎康「後漢の交趾刺史について―土變をめぐる諸勢力―」(『史學』三三、一九六一年)。

(10) 尾崎康(一九六一)。

(11) 處近海、多犀・象・毒冒・珠璣・銀・銅・果・布之湊、中國往商賈者多取富焉。番禺、其一都會也(『漢書』卷二十八下地理志下 粵地)。

また、護雅夫編『漢とローマ』(東西文明の交流第一卷、平凡社、一九七〇年、第六章第二節)などを参照。

(12) 『漢書』卷九十五 南粵傳に、文帝が趙佗に與えた詔に、「當其時長沙苦之、南郡尤甚、雖王之國、庸獨利乎」とある。なお、この文帝の詔は、『史記』の南越傳には見えない。

(13) 吉開將人「印からみた南越世界(後篇)―嶺南古璽印考―」(『東洋文化研究所紀要』一三九、東京大學東洋文化研究所、二〇〇

〇〇年)

(14) 桂陽郡南部から番禺方面に流れる匯水の名稱は、『漢書』が「湟水」としており、『水經注』は「涇水」で節を設けている。ただ、六朝以前の中國の河川の説明をする場合、やはり『水經注』が基本となるため、本文では「涇水」を並記しておく。

(15) この武帝による南越討伐路については、河原正博「秦の始皇帝の嶺南經略とその年代を中心として」(『法政大學文學部紀要』一、一九五四年)・『漢民族華南發展史研究』吉川弘文館、一九八四年改題所收)などが詳細な検討を加えているため、そちらも参照されたい。

(16) 譚其驥『中國歷史地圖集二(秦漢)』(中國地圖出版社、一九八二年)に依據しつつ、本稿向けに簡略化している。下記の圖?も同様である。

(17) 横浦の位置については、『史記索隱』所引「南康記」に、「南野縣大庾嶺三十里至横浦、有秦時關」とあり、本稿の圖では『漢書』卷二十八地理志上豫章郡の「南野縣」に比定している。

(18) 狩野直禎『後漢政治史の研究』(同朋舎出版、一九九三年)等を参照。

(19) H. Maspero <1918>。

(20) 後藤均平「徵姉妹の亂」(『中國古代史研究』第三、一九六九年所收)。

(21) 「南蠻傳」に、「光武中興、錫光爲交趾、任延守九眞、於是教其耕稼、制爲冠履、初設媠媠、始知姻娶、建立學校、導之禮義。建武十二年、九眞徼外蠻里張游、率種人慕化內屬、封爲歸漢里君。明年、南越徼外蠻夷獻白雉、白兔」とある。後藤均平(一九

六九)は、この後の徵姉妹の亂という矛盾した情勢の變化から、そもそも「教其耕稼、制爲冠履、初設媠媠、始知姻娶、建立學校、導之禮義」という政策自體が在地豪族への壓迫であったとしている。

(22) H. Maspero <1918>。

(23) 後藤均平(一九六九)。また、吉開將人(二〇〇二)は、前漢武帝の南越遠征後の嶺南支配について、前漢の領域が基本的に南越の遺産を引き繼いだものでしかなく、さらに南越滅亡後も南越の舊制に則って現地的首長層の地位を保持していたことを明らかにしており、後藤等の論と併せて理解しておきたい。

(24) 武陵蠻の反亂については、谷口房男「後漢時代の武陵蠻—武陵蠻を中心として」(『東洋大學紀要』文學部篇二三、一九六九年)・『華南民族史研究』綠陰書房、一九九六年改題所收)を参照。

(25) 銅虎符は、中央の指揮に基づいて地方の兵員を動員するために地方長官に與えられる割り符。鎌田重雄「秦三十六郡」(『秦漢

政治制度の研究』日本學術振興會、一九六二年所收)等参照。

(26) また、『後漢書』列傳二八度尙傳に、「延熹五年、長沙・零陵賊合七八千人、自稱將軍、入桂陽・蒼梧・南海・交趾、交趾刺史及蒼梧太守望風逃奔、二郡皆沒」とあり、これも實際には交趾部北半にまでまたがる反亂であった。

(27) 『後漢書』列傳六一朱儁傳に、「朱儁字公偉、會稽上虞人也」とある。

(28) 尾崎康(一九六一)が、後に土爨が交趾部地域で臺頭していくうえでの最後の壁として交趾刺史であった朱符の存在の大きさを評價する一方、川手翔生「嶺南土氏の勢力形成をめぐって」(『史觀』一六七、二〇一二年)は、朱符が交趾刺史に着任してすぐに殺害されてしまうという事實から、在地の影響力はもともと大きくなかったと評價する。ただ、本稿では、朱氏の在地の影響力が小さかったとしても、實際に朱符兄弟が交趾や豫章の刺史や太守に任官している以上、朝廷内において朱儁の業績が影響を及ぼすなど、また別の意味での影響があったことについては評價すべきであると考えている。

(29) 満田剛「劉表政權について—漢魏交替期の荊州と交州」(『創價大學人文論集』二〇、二〇〇八年)。

(30) 川手翔生(一九二一年)。

(31) 當時、豫章太守の周術が病没し、朝廷から新太守として朱皓が派遣された。しかし、劉表が先んじて諸葛玄を豫章太守に送り込んでおり(『蜀志』卷三十五 諸葛亮傳注引「獻帝春秋」)、そこで朱皓は、揚州刺史の劉繇から兵を借りて諸葛玄を打ち破るも、劉繇が増援として送った笮融の裏切りに遭って殺されてしまう。(『資治通鑑』卷六十一 獻帝紀 興平二年の條) なお、『資治通鑑』は、諸葛玄を起用したのは袁術としているが、本稿では「獻帝春秋」に従っておく。

(32) 川手(一九二二)は、興平二(一九五)年、當時の交趾刺史であった朱符が、弟の豫章太守の朱皓が殺された報復の軍を起こうとした所で、その負擔を要因として地元民に殺害されたのではないかとしている。

(33) 満田剛(一九〇八年)。

(34) 尾崎康(一九六一)は、建安八(二〇三)年に州に昇格したとしており、本稿はこれに従う。

(35) 『吳志』卷四十九 士燮傳に、「朱符死後、漢遣張津爲交州刺史、津後又爲其將區景所殺、而荊州牧劉表遣零陵賴恭代津。是時蒼梧太守史璜死、表又遣吳巨代之、與恭俱至」とある。

(36) 川手翔生(一九二二年)によれば、興平二(一九五)年、當時の交趾刺史であった朱符は、弟の豫章太守の朱皓が殺された報復の軍を起こうとした所で地元民に殺害され、一時的に生じた交趾刺史の空位から交趾部は混亂状態に陥り、その間隙を突いて交趾太守の土爨が朝廷に上表、自らの兄弟をそれぞれ合浦・九真・南海太守に送り込み、上記四郡を掌握したと言う。また、



川手は、張津死後、土變は正式な州牧ではないものの、「綏南中郎將」・「安遠將軍」といった軍權に加え「董督七郡」といった交阯七郡全域における監察權を得ており（『吳志』卷四十九 土變傳）、事實上の「州牧」であり、なおかつ朝廷に公認されたと捉えている。